

過保護すぎる幼なじみは、監禁級に溺愛してくる

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

大学の正門に、今日も見慣れた影が立っていた。

長身、長髪。甘いようで鋭い目つき。なぜかチャイナ系の服。

彼は私の幼なじみで、そして彼氏。

名前は飯塚宏樹——私は子供の頃からロキって呼んでいる。

家は近所で、物心ついたときからずっと一緒だった。

幼稚園の頃は毎朝のように手をつないで登園して帰りはどちらかの家で遊んで、そのまま夕飯まで一緒に過ごすのが当たり前。

ロキはその頃から、私のことが大好きだったらしい。

気づけばいつも私の近くにいて、クラスの席替えのときも、まるで当然みたいに私の隣を陣取っていた。

高校の頃には「飯塚くんって彩音ちゃんのボディーガード？」

なんて笑われるくらい、私のそばを離れない。

そのせいか、私の周りには男の子が寄ってこない。

本人がわざとやっているのかどうかは分からないけれど、結果的に私はずっとロキに守られてきた。

正直、溺愛されていると言っている。そして、気分は悪くない。むしろ、そんな風に大切にされていることを、どこか誇らしく思っている自分がいる。

ロキはとんでもなく頭が良くて、どんな難関大学でも受かるって

先生が言っていたのに、「彩音がいる大学に行く」って、わざわざこの地元の大学を選んでくれた。

だからこうして、大学の正門で私を待っている姿を見かけると、胸がじんわり熱くなる。

——ロキは、いつも私だけを見ている。

「……あの人、また待ってる」

「彩音ちゃん、もしかして監禁されてる？　だったら瞬きして？」

新学期のキャンパスは親切心と好奇心でいっぱいだ。

私は笑って、ひらひらと手を振った。

「もう、ロキったら人気者だねえ」

「人気……なのか？」

「うん、視線を集めてるって意味ではね」

ロキは特に気にした様子もなく、私のカバンをすっと肩から奪って持ってしまう。

その仕草はどう見ても“ボディガード”か“監禁男”。

でも真実は——ただの過保護。

ゼミ終わりは吹奏楽サークル。

私はフルート、ロキは……シンバル。

シャーンって鳴らすためだけに、あの体格で後列に立っている。

理由？ もちろん「彩音（私）のそばにいたいから」。

指揮者が困ったように視線を泳がせる。

「飯塚くん……顔はもうちよつと柔らかく……いや、無理だな。せめて音だけでも柔らかくして」

ロキは真剣にうなずき、音だけふわつとさせる。

でも顔は怖いまま。私は笑いをこらえるのに必死だった。

視線が合うと、彼が口パクで「彩音かわいい」と言う。

練習が終わると、ロキは私のフルートケースを奪い、肩にかける。

「これくらい重くないよ？」

「でも俺が持つ」

毎回、そのやり取りをしながら帰宅する。いつものお約束だ。

玄関先ではママが庭木に水撒きしていた。

「あらあら、宏樹くん、今日も彩音ちゃんの荷物ありがとうね」

「いえ……」

パパはリビングで新聞から顔をあげて、苦い声で「またお前か！
勝手に上がり込んで！」とお説教。

けれどロキが米袋やらペットボトルやら重たい荷物を運びこめば
「……助かる」と結局、折れる。

自室のドアを閉めた瞬間、ロキの声がやわらかく低く変わる。

背中から抱き込まれて、私の頭は彼の顎の下に収まった。

「今日も、頑張ったな」

「ロキもね。シンバルのシャーン、可愛かったよ」

「……可愛い？」

「うん。顔は怖いけど、音は可愛い」

顎の骨ばったラインが髪にこつんと触れて、くすぐったい。

腰に回された手の大きさに、布越しでも力強さが伝わる。

大きな腕にぎゅっと抱き込まれて顎の下にすっぽり収まる私の頭。三十センチの身長差がまるごと包み込まれるような安心感を生む。

「彩音、今日も大好きだよ」

低い声が耳もとにかかり、胸の奥がきゅんと鳴る。

振り返る間もなく、唇を重ねられた。

舌先が割り込んできて、柔らかな口内をねっとり舐め回す。

ちゅぷ、じゅる……じゅる……。

吸い合う水音が部屋いっぱいに響いて、体が熱を持っていく。

「んっ……ロキ……っ」

喉が詰まったような声が漏れると、ロキは喉仏を震わせながら唇を強く吸った。厚い舌が絡みついてくる。

すくい上げられ押し込まれ、離れた瞬間にまた甘く捕らえられる。舌の根元までくわえ込まれるみたいで、酸素の代わりにロキの吐息ばかりを吸い込んでしまう。

「……可愛い」

低い囁きが唇の隙間から流れ込み、頬の奥まで痺れる。

顎のラインを大きな掌で支えられ、ぐいっと角度を変えられる。

彼の腕は硬く、肘から手首までの筋肉が緊張していて、逃げ道などどこにもない。

「……ロキ、だいすき……♡」

舌先で首筋をなぞられ、びくんと肩が跳ねる。そこにまた唇が落ち、吸われ、跡を刻まれる。

「……可愛すぎ」

耳たぶを甘噛みされた瞬間、思わず声が弾んでしまった。

ロキの息が荒くなり、私の舌をまた絡め取る。

水音に混ざって、二人の吐息が濡れた空気を揺らす。

夜は、昼間の分を取り戻すように。

ひとつの口づけで、何度も溶かされてしまう。

キスの合間に、ふと昔のことを思い出す。

ロキ、アマガエル押し付けられて、泣きながら逃げてたっけ。

幼稚園の頃、細っこくて泣き虫だったロキを、私がいじめっ子からかばったんだ。

「おおきくなったら、ぼくが彩音ちゃんをまもるんだ」

——泣きながらも、そう言い切ったロキ。

あのときは子どもの戯言だと思っていた。

でも本当に有言実行で、筋トレを続け、大男に変貌し、私のそばに居続けてくれている。服のセンスは壊滅的だけど。

ロキはいつも、私にだけ一生懸命「可愛い」を届けてくれる。

ロキの唇が深く絡みついてきて、ぐちゃぐちゃに混ざり合う。

そのキスが熱すぎて、頭の芯がとろけてしまいそうだった。

「ロキ……っ、わたし……もう、したくなっちゃった……」

震える声で吐き出すと、彼はわざと名残惜しそうに唇を離し低く囁いた。

「いいよ。彩音、どんなふうにしてほしい？」

恥ずかしくて頬が火照るのを感じながら、それでも正直に答えてしまう。

「……あのね、抱っこされて、奥まで届いて……クリちゃん擦れるやつ……あれ、大好きなの……」

ロキの瞳がいやらしく光り、「いいよ」と低く呟いた瞬間

私はひょいと軽々と抱え上げられた。

背中を壁に押し付けられた次の刹那、ショーツを横にずらされぐちゅっ、と音を立てて膣奥まで一気に突き込まれる。

「んあぁっ……っ！すごい……っ、奥まで……当たって……っ！」
腰を打ちつけられるたびに、膣壁がぐちゃぐちゃにかき回されて、クリトリスが彼の下腹に押し潰される。

「ひぁっ……！あっ……クリちゃん、こすれて気持ちいいっ！」
声を上げると、ロキは笑いながら、乳首を舌で転がした。

「こっちも、かわいいがってあげる……彩音、かわいい……」
乳首を甘噛まれ、腰の奥まで痺れるような電流が走る。

ぐちゅぐちゅといやらしい水音が二人の間で鳴り続ける。

声を抑えようとしたけれど堪えきれなくてロキの肩に噛みついた。

「……んんっ……ロキ……っ！」

「いいよ、もっと噛んで……俺の肩、壊れてもいいよ……」

涙がにじむほど奥を突かれながら、肛門のあたりを撫でられビクツと身体が跳ねる。

「やあっ……そこは……だめえ……っ！」

「分かんないよ、彩音……気持ちいいかもしれないだろ？」

そう囁かれた瞬間、太い指先が後ろの小さな穴に押し当てられる。まだ誰にも触れられたことのない場所に、侵入してくる熱い異物。

「んんっ……やあっ……そこは、だめえ……っ！」

きゅうつと本能的に指を締め付ける。

だけどロキは構わず、ぬるりと指を押し込み、第二関節まで一気に潜り込ませた。

膣を肉棒で激しく抉られながら、後ろは指がぐにゅぐにゅと押し広げてくる。

「ひあっ……っ！ やだ、変な感じ……っ、奥まで、指があっ！」
指はただ入っただけじゃなかった。

穴の内側をじっくり掻き回すように、ぐりぐりと円を描きながら広げられていく。指の腹が粘膜をこすり、時折きゅっと持ち上げるように刺激を加えてくる。

「ほら……彩音、前と後ろ、両方で俺を感じて……」

膣はぐちゃぐちゃと水音を立てて肉棒を飲み込み、後ろの穴はひく

ひくと収縮し前後から責められる刺激が頭を真っ白にしていく。

「んあぁっ……っ！だめっ、ロキ……そんな……前も後ろも一緒に
されたら……おかしくなっちゃう……っ！」

ロキの指はときに奥をぐっと押し、次の瞬間は浅い部分を擦り上げるように動く。

その度に肛門の奥からせり上がってくる感覚と、膣奥を抉られる快感が重なり合って、彩音は理性を完全に吹き飛ばされていた。膣も尻も同時に嬲られて、全身が痙攣する。

声を殺そうとしても無理で、甘い叫びが勝手にこぼれる。

「ロキ……っ、イクっイクイクイク……中に出してええ！」

「彩音……愛してる……っ、愛してる、大好きだ……っ！」

その瞬間、膣奥にどくどくと熱が溢れ込んで、意識が弾け飛んだ。

「んあぁっ……っ！ ……奥、いっぱい……しゅごい……♡」

震える身体をロキに抱き締められ、耳元で何度も「愛してる」と囁かれながら、私はぐちゃぐちゃに溶かされて彼に堕ちていった。

ドアの外でパパの咳払いが聞こえる。

「……あんまり遅くまで居座るなよ」

「はい、お父さん。明日の粗大ゴミ、俺にらせてください」

「お、おう、……助かる」

こうして誤解されがちな彼と私の、ラブラブの日常は過ぎていく。

第二話

大学のキャンパスを歩くとき私はだいたいロキの影になっている。
身長差三十センチ、横に並べば通路の半分をロキが占拠し、後ろに
いれば私に日傘みたいな影を落とす。

「飯塚ってさ……いつも彩音ちゃんと一緒だよな」

「いやもう“監禁”だろ。彩音ちゃん自由なさそう」

今日も安定に、すれ違う学生たちのひそひそ声。

私は笑顔で手を振るけど、それはそれで「笑顔で耐えてる健気な
彼女」に見えるらしい。

（耐えてないんだけどなあ。むしろ幸せなんだけど）